
心願成就に大切なこと

21144444

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心願成就に大切なこと

【Nコード】

N5430W

【作者名】

21144444

【あらすじ】

元勇者が勇者になる話

ブログ？（前書き）

眠いときに書いたために文章不安定
でも負けない

プロローグ？

この世界に最も巨大な大陸、それを人は『アタペル』と呼んでいる。そしてその大陸には、大きく分けて四つの国々があった。

その国々を国境をみると、縦横一閃程度の簡素な分け方だが、その国の中にはたくさんの貴族による領地で作られていたりする。

そのアタペルに、勇者がでてくる物語が一遍だけある。

俺こと『レオンハルト・クォーツ』は、家の広間に飾られているその像をみて、小さくふうとため息をつく。

俺の家は公爵家であり、権力は絶大だ、そのお偉い公爵家が崇拝するがごとくに祭っているところをみると、勇者というものはとても尊敬されているものらしい。

貴族の少年、剣を引き抜いた 勇者

過去、魔王という存在がいて、それを倒した勇者の少年。

名前は『レオン』、俺の名前の由来でもある。

そのレオンは貴族の権力を大きくした存在でもあるのだから、崇拝する理由はほかにあるまい。

ところがどっこい、その勇者は農民出である。

しかも貴族に疎まれて何度か殺されそうになった過去を持っていたりする。

貴族の才能に満ち溢れた剣を引き抜けば才華を発揮し、バツバツタを魔物を倒しつくした物語の真実はこうだ。

魔物なんていなかった、牛とか馬とかがいて、怖いものと言ったら野生のオオカミ。

そんな世界に、突如として魔王という存在が現れたわけだ。

この大陸以外にも国はあったわけだが、簡単に陥落、そして最後はお前らだと言わんばかりに魔物の大群引き連れやってきたわけで。

『平和な世界に魔王という存在がやってくる。』

そんな魔王は、さっくりとこの大陸の一つの国を落とした。
そして次の国はお隣である勇者がいた国、そして最前線は農民でザ
ツクザツクと土を耕していた勇者がいた村、名前は『セレント』、
もうその村名は消えてなくなっているけどね。

『国は落とされ、次の国の貴族であったレオンは巨大な勢力であっ
たとしても勇気を振り絞る。』

農民なんて重要性などランキングは乞食より上なだけの事実上職業
ランキング最下位の重要性なわけで、そんな農民しかない村人を
助けるために絶望するほどの大群を足止めする兵なんていない。
王家でも逃がすことに躍起になっているだろう。

徴収され続けて、こんなものだった。

徴収され続けたけど、勇者は母と父、三人で楽しかった。

『貴族の少年は魔物に剣を折られ、変わりがないかと思い探し回ると、そこに剣が美しい台座に飾られ、美しい光を放ってそこにあった。』

侵略が開始され、村が火に包まれる、勇者は途中で両親と離れ離れになって、思いついたのは昔遊び場に使っていた秘密基地だった。両親にも、もうそれは秘密ではないだろうが教えていた記憶がある。だったら思いついて来てくれるだろうか、そう願う勇者は秘密基地の洞穴へと歩いて行った。

だが待てども両親はこない、勇者はもしかして奥にいるのかもしれないと思って奥へと向かう、そこには幼いころ入れなかったがれきの山があるだけで両親の姿はない。

どうしたものか、そう思ったとき勇者は風を感じて探してみる、石

をどかすとそこには穴があった。
その奥に隠れているのかもしれない、可能性は極めて低いが、調べるべきだと思い奥へと向かうが、そこには剣が一本突き刺さっているだけだった。

『貴族の少年は一本の剣を発見し、引き抜く、その剣は彼のためにあるかのような美しい剣だった。』

「剣？」

洞穴の奥に剣が一本、そこにはシンプルな装飾の土台であり、真つ暗闇の洞窟に、淡い光を放ってそこにあった。

護身用になると思い、それを引き抜けば楽々抜ける。

戻ってみると両親はいないわけで、外に行くことにした。

そして戻ってみると父は殺され、次は母といった状態。

飛び出す勇者、剣を振ったことなどさっぱりない、だがそれでも一閃で魔物をたたききる。
母が叫ぶ「レオン、レオンだけでも逃げなさい」そう叫んでいる。
だが勇者は逃げない。
逃げるわけにはいかなかった。
震えながらも、吠える
！

『貴族の少年は剣とともに美しい戦いを見せ、魔物を一瞬で倒しくした。』

「うおおおおおおおおおおおおああああおお」

途中声が裏返りながらも、思うままに切り裂いていく　その動きは歴戦の勇士のように。
言ってしまうてはいけなだろうが、剣に使われていた。

だがしかし母を護るためには十分であり、この場にいる魔物を切り

裂き、勝利し、そして荷物をまとめこの国を出た。

しかし、魔王が大群をひきつれてきているこの状況だ、軍事にお金を注ぎ込んでいるだろうし、亡命者を迎える余裕もない、いつきにホームレスだった。

だけど、俺は剣をもっていた、お金も欲しかった
だから 戦いへと向かう。

『自分の国は敗れ去ったが、まだ勇者は希望を持っていた、次の国で迎えられ、たくさんの喜びの声を向けられた』

お金が欲しかった、それもある。
でも、俺は心から願う、

俺が英雄になれば、でっかい英雄になれば、農民も見直されるんじゃないかって

『騎士に才能を見初められ、剣を習う、魔法の才能をもって魔法を習う、勇者の才覚はとどまることをしらない』

必死だった、偉そうな騎士に土下座して、頭を踏まれながらも、半ばいじめのように殴られても強さを求めた。
魔法も難題だった、罵詈雑言を浴びせられながらも必死に勉強をした。

『勇者の仲間はそんな勇者に轢かれ、自然についていく』

あいつらは勇者の思想に笑って『いいだろう、ついてってやる』なんていつて

それで沢山の種族の仲間ができ、人間に忌み嫌われていようと仲間にして

沢山の勲章を得て、国から屋敷をもらって、母さんに住まわせて、
楽させて

『勇者は人々の希望を胸に、魔王を切り裂き、倒した』

それで、それで　魔王を道連れにしたんだ。

プロローグ？（前書き）

次回の更新は14日12時

起きた瞬間に書いてみた、ちょっと気分がハイになってた。

プロローグ？

真実は人の記憶の中に

そしてその人は、息絶えた。

そして嘘は真実へ

勇者がいれば声高らかに叫ぶ。

『俺は貴族ではない、農民だ。』

そう叫ぶ。

だけどそうはできないわけだ、まあ理由は『死んだから』だ。

死んだら何もできない。

死んだら何にもならない。

生まれ変わっても、それは勇者ではない。

そう、俺は勇者”だった”。

元の名前はレオン、今の名前はレオンハルト、皮肉か、皮肉にしか聞こえない。

勇者のようになれば、たぶん両親は勇者のように、文献に書かれているように美しい剣術を使い、どんな逆境でもはねのける剣士になれると言いたかったのだろう。

だが俺には無理だ、そんなことはわかりきっている。

俺は土の味をかみしめて、口の中に血の鉄の味を日常と置きながら、俺は再びこの地に舞い降りたわけだ。

あの日々は脳裏に焼き付いている。

あの日々はすでに権力者たちに裏切られ、自らの権力のために使われた。

仲間たちはどこにいったらうか、無事天国にいったらうか、そんなことを考える。

仲間たちの文献は農民の権力をあげるための発言を少し残していた、他の文献は消されている。

まだ死んでいない仲間はいる、ちいさな少女だったエルフの少女と永遠の時を生きる吸血鬼、龍の血を持った戦士。

だが彼らはすでに俺の思想を果たそうとはしていなかった。

理由は簡単だ、無駄だと悟ったからだ。

エルフは森の住民であり、表舞台にでるとしてもほんの少し、吸血

鬼など忌み嫌われ、龍の血をもった戦士は、一人で龍人が生きる里へと戻っていった、たぶん、この人の世に嫌気がさしたのだろう。

この世に生まれ、俺は少しだけ期待していた。だが、帰ってきたのは絶望だった。

だが、俺は…諦めなどしない。

屈したりするものか、俺は農民だった、俺は土の味を知っている。見下した眼で、俺の頭を踏みながら、お願いし続ける俺を笑い続ける騎士を知っている。

何十人もの貴族の手によって雇われた殺し屋どもに腕を焼かれた痛みを知っている。

そして俺は、これ以上ない絶望を知った。

俺は600年たったこの世界で、俺は

それでも願い続け、追いつけることを辞めない。

自らを天才魔術師と自称し続けた魔術師『ミステイオ』

ニヒルな笑みを浮かべながら、俺を支え続けてくれた策士『ソア』
暑苦しさなど気にしないが口癖の斧使い『ガイスト』

私の占いはおそらく当たる！と笑いながら100%当て続けた占い師『リイエステイアーナ』

貴族でありながら異例で、親にも縁を切られながら、俺の思想を聞いて楽しそうだった『ファイス』

偉そうなことを言いながら回復魔法以外攻撃魔法も生活力も0なシスター『トウーナ』

ツツコミ役之苦労性、口癖が『このメンバーにはいったのが最後か』
な『アリストリス』

実力はあるのにちょっと強い敵に当たるとたんにヘタレになる女戦士『ベリー』

そしていまだ生きている

いつも俺の後ろに隠れてたエルフの少女、今はエルフの族長だつていうからうれしいものだな『ダリア』

見た目は15歳、中身はババアとからかわれて向きになっていた吸血鬼『シンシア』

最もヘタレなくせに、俺が死んだあとひたすらに人助けをし始めて英雄と呼ばれた『クルス』

…ありがとう。

お前らと会えるかはわからないけど、俺は歩いていくよ。

俺一人だつたらめげていたかもしれない。

だけど、俺の背にはお前らの、俺の思想を聞いたときの笑顔がある。背を押してくれた日々がある。

だから、俺はやっていける。

それが2歳の幼児の決意だつていうんだからおかしな話だよな。

第一話『戦い方』

ヒヤッハア、俺は元勇者だあ、それってすでに最強ってことだあ、馬鹿め、俺はすでに3歳でそこらへんの剣士のレベルだったのさあ

んなわけもなく。

「ぐががが」

剣を持つこと自体に奮闘中。

…恐ろしいくらいに前途多難だ。

「ちつくしょう！」

剣を叩きつける、もてているわけではないので、そのまま強く置く程度にしかないのが恨めしい。

「筋肉が欲しい！」

ガイストよ、暑苦しいなどといって笑ってはいたが本当にすまなかった。

俺はマツチヨマンになるべきだったのだ、俺はマツチヨマンになって暑苦しくともムキムキな体を習得しなければならなかったのだ。

「何をしているのかしら、レオンハルト？」

そんなことを考えていたら声がする、この凜とした声は母上だろう。母の名前は『シャルロッテ・クォーツ』、弱小貴族という位置づけ

になる母であるが、公爵の父となぜ結婚したかという、母が騎士であつたということから話が始まる。

そのあと父がデレデレとした顔をしながら『美すぎる騎士に私の心は一撃にて奪われたのだby父』などとキリツとした顔で言ってくるので、奮闘し続けて恋とか忘れた前世を送った俺はイライラして思わず父の朝のコーヒーを泥水にしたのは今なら笑って言える話だ。

父はそれでもおいしそうに飲んでいたのは秘密だ。

「け、剣を振ろうとしているのです、母上。僕も父から言われた母のような騎士になりたいのです。」

英雄になりたいのです！そんなことを言われても相手はされないだろう。

だからこそ母を出す。

そんなことを考えていたらイヤンイヤンと気色悪い動きをしてのろけ話をする父を思い出してしまった。

イラッときたから今日は寝ているときに自慢のひげを全部剃ってやろうと思う。

「しかしねレオンハルト、あなたの歳で剣に触れるほうがどうかしているのですよ？」

『レオンハルト・クォーツ』年齢3歳

鉄の剣は当然のごとく重量があり、振り回せるかと問われればNO焦りすぎだったかもしれない、でも

「僕は、強くなりたいです。」

そう母の目をみて言う、この思想は本当だから。

母はちよつと考えてみると、俺の目を見返してくる。

「あなたの年齢で強くなろうと考えるのは大切なことです。私も小さな頃、弱小であった私の家を支えるためにはどうすればいいかと考えておりました。」

母の目にあつたのは確固たる意志、家族を護りたいという意思。だが俺はその意志に負けない、いや 勝つ。

「ならば強くなろうと思つて剣を掴みましたが、やはり貴族と生きていたせいか、私は力がありませんでした。だからやることは剣を振り回すのではなく最初は体をどう鍛えるかを考えましたよ、レオンハルト。あなたはどんな剣士になりたいのですか？」

「どんなつて」

前世、勇者”であつた”自身を思い出す。

剣は中ぐらい、戦い方は正攻法でありながらもアクロバティックな動きを重ねて使用し、すばやく移動して戦っていた。

「速い 剣士です。」

「速いといわれても人の戦い方は自在です。正攻法な戦い方では剣裁きの速さ、横の動きの速さ、攻撃に移り変わる速さなどがあります。どれを重点的にするのですか？」

うう、3歳の幼児になにを要求しているんだこの母は。

「け、剣裁きを主体にして、横の動きで惑わしながら、場所を選ばず土地を利用する、そんな戦い方です。」

「つまり、軽めの剣を使う戦い方ですね。手数を多く使い、自分の体を、力の動きを大いに利用する。そんな戦い方、と。」

すごい、そう思った。

俺のやりたい戦い方が簡単にできている。

「わかりました。では必要なのは持久力とともに体のバネを活用した戦い方ですね。力は必要以上に必要ではありません。筋力を高めようなんて考えないでください。…絶対あなたマツチヨが欲しいとか考えていたでしょう。」

…

なぜわかった

「私は息子が暑苦しくなるのは勘弁ですよ、レオンハルト。とりあえず貴方がいまやることは持久力を高めることです。持久力を高めて、私が良いと思ったら打ち合いくらいは許可しましょう。」

「ですが母上、暑苦しきなど関係な「黙りなさい」「ごめんなさい」

ごめんガイスト、やっぱ暑苦しいのは嫌だ。

「えっと、じゃあ僕は」

「勉強した後に、この屋敷を走ってください、重りなどはあなたの成長途中に害を及ぼすかもしれませんので、付けません。あなたは自分のペースをしまって、そしてそれを使ってより長く、休まず走り続けることを考えてください。ペースをすることは自分のリズムを

知ることです。あなたの手数を使った戦い方は速さで一瞬で決められるかもしれませんが、それは敵が未熟であるということを絶対条件に置かなければなりません、敵は熟練であれば、どんなに速くとも対処されます。」

「走り続けられいいんですか？」

「最初はペースをしることで。走り続ける時間が長くなれば、それを併用しながらも筋力を作ることにしますが 過度は許しません。前にも言った通り、貴方は成長過程、それを阻害するような行為は私が許しません。絶対にサラサラ金髪ヘアーが似合う美少年にします。」

…あれ？それ母上の願望入ってない？

「は、母上？いまちょっと母上の本音がでたような」

「でてません、いつでした、いつでしたか？」

「ごめんなさい。」

…母上は修羅を召喚できるらしい。

はあ、とこちらがつきたいがため息をついて母はこちらをみる。

「ハッキリ言えば、いきなり剣を持つことなど言語道断です。だからあなたは持久力を上げ続けることと、筋力を着けること、ですが必要以上の筋力につけないことを絶対条件です。」

「は、はあ」

「ですが勉強は厳かにしてはなりませんよ、レオンハルト。あなたは公爵家の人間であり、姫などにもつながるのです。貴方は私の手によってサラサラ金髪ヘアーが似合い、脱げばすぐく女の子がドキッときちやう美少年にします。」

…あれ、いや本当に母上絶対に願望いれてるよね？

「はは「でてません、いつでましたか？」…ごめんなさい。」

もう謝るしかない、この迫力は細身の美女のどこからくるのだろうか。

「レオンハルト」

「は、はい！」

「あなたは母をその気にさせるほどに美少年になりなさい。」

そ、その気？その…その木…母上木になっちゃうんですか？わあすごい、すごいなーうん
すごいすごい…ごめんなさいわかってます、父さんや、本性暴けてませんよ。一目ぼれしすぎて何も見えなくなってますよ。

「さて、貴方には剣士になりますが、母がなれなかった魔法剣士というものにもチャレンジしてもらいます。」

「魔法、剣士？」

「剣に魔法を宿し、その剣を力の塊にして敵に剣としてぶつけるそれが魔法剣士です、魔法剣というものにも技術があります」

あなたは若い以前に子供なのでまだ必要はないでしょう。」

「は…はあ」

魔法剣という剣士としてのジャンル、というべきか。

剣士というものには多種多様な種類がある。

おおざっぱにすれば

速さでいくか、力でいくか。

力でいけば長い剣、もしくは大きく重い剣

速さでいくならば短い剣、そして細い剣。

長い剣も、力などで速く動かしたり、重い剣でさえも使い手により
すばやくなりはあるが、ハッキリいつてしまえばそれほどの使い手
は百年の一度といえるほどに希少だ。

「それではレオンハルト、貴方の戦い方は速い剣ですが、どんな剣
かは今は決めることではないでしょう、少なくとも振れるほどに力
をつけ、そのころから暇なときは振るほどに剣に慣れ、剣を一部の
ように感じられるほどに日常として振りなさい。」

「ハイ！」

「それでは走りましょう。武骨な筋肉の塊にならぬよう。考え方で
すが、私は力ばかり肥えて長く持久力のない剣士は相手が避けるこ
とを重点的に移動して翻弄すればすぐに落ちます。剣士とは力ばか
りではなく持久力を兼ね備えなければ、戦場で疲れてさえもすれば
格好的にしかありません。だから走りなさい。」

「ハイ！」

「最後に、剣士にとって必要なものは1、2を争えば2がかかる蹴落とされるほどに経験です。それでは。」

「じゃいつてきます!」

「はい、いつてらっしゃい」

俺の修行がはじまった!

第二話『体をつくる』

「ぜひっぜひっこひゅーこひゅー」

足が悲鳴をあげるまで全力疾走

「ひいっひいひいっ」

全身が動かなくなるまで筋トレと柔軟。

これって日常だね！

「柔軟は大切ですよ、レオンハルト」

「Yes ,sir」

最近下っ端根性がついてきたと思う。

「柔軟はどの武術でも必要となるものです。体は万遍なくやわらかい状態にしましょう。では地面に座って足をそろえてのばし、足のつまさきを感じるようにしてください。」

「さわれました！」

「では押します。痛かったら痛いといってください。」

「はい。」

これは日常風景かもしれない、武術としても柔軟性というものは必要だし、母がいつているのもっともだ、そしてこの運動は柔軟さを手に入れるには基本中の基本だが

「はいはい。」

「うぐっ、ちょ母上、痛いです。」

「すみません聞こえません。」

「い、いちえりっ！？今強めみやぎっ！？」

光景は普通でも母がおかしい。

満面の笑みで俺を押し続けている。

最近不安に思っていることは、母が息子をいじめて楽しむサディストな変態ではないかということだ。

「いちえおお?!」

「もっと?そうですかわかりました。」

「いつてなぼ!?!」

「もっとですか、レオンハルトはやわらかいですね。」

「ひやはうぎっ!?!」

「はいなんでしょうか?」

なんでそこはちゃんと聞き取れるんだよ!おかしいだろ!

「ちかりやがが!よわみゃうっ…てくだしゃ…いがっ!?!」

「何故そんなにも美しいのですか、ですか…!」

何を聞いていたんだこの人は!?

なぜになる言葉がいつ現れた!?

ひやはうぎを母上と聞き取れたのに何故聞き取れない!

ああもうツツコミところが多すぎて嫌になる!

「やりすぎもいけませんし、これくらいにしましょう。痛がる貴方

を見ていたくはありません。」

お願いだからその満面の笑みをやめてください。

走り続けて一週間がたち、基本的な体をつくると言われて筋トレと柔軟をする。

筋トレは辛い、それでも範囲内だが、柔軟はキツイ、痛いという
か精神的にキツイ。

走り回るといったことは続けてきたわけだが、結構慣れてきたし、
ある程度の持久力はできたと思う。

最初は20分も走れば動けなくなっただが、いまでは+10分くらい
にはなった。

それもこれも母のおかげだ。

前世では無理な物をやり続けていたせいか、体はボロボロだったし
倒れることもしばしばあった。

だが仲間の回復魔法などがあったおかげで、それを治療できたわけ
だが、正直心配されていたのはわかっていた、余裕がなかったとい

うのは言い訳になるだろうが、今思い出してみたあいつらの心配する顔は心を痛めてくる。

無理… はないわけではないけれど、計画的にやっているからこそ倒れることはなく、強くなっている感覚がよく理解できた。

まあまだ一週間だけど。

無理な運動は控えようと思う、母を心配させるわけにはいかない。

満面の笑みを思い出して心配するのか不安になったのは自分の心の中へ

「いいですかレオンハルト、体とは食事と運動によって作られるものです。食事には大いに気をはらっているので大丈夫ですが、運動に関しては管理しながらやっていくべきです。体を壊すほどやるの

は愚行です。体について知りながら、相談しながらやることが最も大切です。」

「はい。」

「それではメニューを2倍にします。」

「…ハイ？」

「聞こえませんでした？メニューを2倍にするのです。…まあいつてしまえば内容は色々かわりますが。」

「えつと母上、無理しないようにと言われたばかりなのですが。」

…聞いてみる、絶対に無駄だけど

「何をいつているのですかレオンハルト」

ほらみる

「無理のギリギリを攻めるにきまつているじゃありませんか。」

父さん、土地の管理や経営がんばってくれてありがとう。

ノロケ話をひたすらに聞かされてイラツときたからって椅子の足を削って思い切り転倒するのをみて笑っていたことは謝ります。

助
k

第三話『父と母』（前書き）

いつもいつも、母の勇者をみる眼は心配という言葉を宿していた。帰ってくれば出迎えてくれて、体を気遣ってくれて、それは勇者をいたわるように見えて、それは勇者を止めようとしていた。

「もういいから。もういいから。」

何度も泣きながら勇者の母は勇者にすがりつく。

息子が血だらけになって帰ってくるのを何度も見ていたからこそ、それをため続けていたからこそ、涙は滝のように流れ続ける。

勇者の周りは敵だらけだった、戦場で負傷しても、治癒魔法さえもかけてくれないほどに、勇者は敵視されていた。

愛する母の涙、それでも勇者はそれを押しのけて、笑うのだ。

「まだ、大丈夫だって。」

戦場で震える腕はいまだ止まらない。

それは戦場に慣れていないという意味なのだろう、それを馬鹿にされたことはあった。

しかし、勇者は笑うのだ。

ああ、俺はまだ人であり続けられる。

- 真実の物語 -

第三話『父と母』

カタカタと震える腕をみる。

銀のフォークとナイフが揺れて、上に乗る料理を切り取るうとしても上手く切り取れない。

その感覚が懐かしくて、すこし笑ってしまった。

「レオンハルト。」

その声に前を向くと、そこにいたのは父だった。

髭はない、まあ俺自身が剃ったからというのも理由だ。

「母の指導は辛いかな？」

その声に首を振る。

少しばかり不安そうだったのだろう、前世では嫌いでしかなかった貴族だが、それでも家族の愛というものはあったのだ。

「つらい、そうですね、つらいです。でも父上、まだ大丈夫です。」

「その言葉が私を不安にさせるのだが。」

そういつて父はため息をつく、その言葉に少しだけ驚いた。

「…不安にさせますか？」

母は、この言葉を言えばため息を付きながらも笑ってくれたというのに、そう思っただけ聞き返してみれば、父は大きくうなずいた。

「限界までいくように感じられて、な。」

限界、まで……いく。

前世の、母にもそう聞こえてしまっていたのだろうか、それでももう諦めていたのだろうか。

母の涙は一時の本音だったのかもしれない。

『もういいから。もういいから。』

その声が耳に残って、それでも何もかもかなぐり捨てて、喧騒と金属のぶつかり合う、悲鳴が上がる戦場へと走り続けていた。

「親として、まるで子供の死期を悟ったような言葉は聞きたくないものだ。」

「（ごめん、母さん）」

その言葉を聞いて、まず思ったことは謝罪の言葉だった。

今は死んでしまっている母への言葉だった。

おそらく、不安にさせていたのだろう、それでも、息子を否定してたくなかったのだろう。

だからこそ心を一新させる。

「父上、私は 強くなります。」

「うむ。」

「それで、戦いから引いた後、のんびりと人生を過ごしたいです。」

「そうか。」

そういつて父は豪快に笑う。

その話を真横で何も言わずいつていた母でさえもクスクスと笑い始める。

自然に俺も 笑っていた。

一年がたつ。

単純な流れで毎日をごす、元の前世よりも長く時間が感じられるが、まあそれも淡々と流れて行った。

今や中庭には剣のぶつかり合う音が聞こえるほどに、レオンハルトは成長していた。

「レオンハルト、貴方の力ではぶつかり合うことはおろか斬りあいにも戦いにもなりません。」

ハッキリと言われた俺ことレオンハルトは、頷く。

まあ年齢はまだ幼児と呼ばれる年齢である。

「だから避けること、避けられなかったら流すことを考えてください。」

そついつて剣を構える母をみれば、すぐに自分も抱える。

「いいですかレオンハルト。」

抱えながら母はゆっくりと口を開き

「――死地にいれば人はすぐに強くなります。」

あのみえる太陽に向かって全力疾走を開始したくなった。

「……何も全力で逃げなくてもいいでしょうに。」

「母上、それは違います。」

全力疾走を開始したくなった？いや違うね、全力疾走をしたのさ！
というアホなことを考えつつも、言い訳を考える。

「ほう、そうですか、では教えてください、その理由とやらを。」

謝りますから剣を突きつけないでください。

「逃げることは避けることにもつながる、かもしれませんね?」

「何故疑問形なのですか…いや、しかし…それもアリかもしれません。」

そういつて考える母を見て、嫌な予感がした。
いや、嫌な予感しかなかった。

「では全力で切りかかるので全力で逃げてください。」

今俺は地雷原へと裸で横になってゴロゴロと回転しながら入っていると思う。

悲鳴が上がった。

メイドや執事は、最初こそ驚いてみていたが、今や誰もみない。

あ、またか、なんて考えているんだろうな、なんて思いつつ。

俺は涙目を隠す暇もなく鬼^{はは}から逃げるのだ。

番外編『ダリア』

『勇者様あ！シンシアがまたいじめる！』

『これダリア、別にいじめとらんじやろ、魔法の練習をしとるだけじゃー！』

『ダリア、もっとガンバレよ…シンシアはもうちょっと優しくしてやれ。』

そういつて勇者は私の頭をなでる。

勇者の名前はレオン、農民出の戦士だった。

それでも彼は農民出という経歴など気にさせないほどに人をひきつけた。

それでも心がけがれた人々は彼を罵倒している。

そんな現状がいやで、私は強くなるうとおもって吸血鬼のシンシアに魔法を習おうと決心したが、すぐにめげてしまった。

だがそんな勇者は私の頭を撫でてくれた、

勇者は人一倍努力しているというのに、すぐにめげる私の頭を撫でて、許してくれた。

優しい勇者様。

尊敬できる勇者様。

だからこそ私は彼の願いに心から共感し、彼の願いがかなうといいなと本当に思った。

でも結果は悲惨だった。

勇者は魔王とともに倒れ、世界を救ったというのに
世界は、権力者は、彼を利用するだけ利用した。

だから私は彼の思想を受け継ぎ、彼の願いをかなえることを決心した。

「しかし 私は今なぜ森の奥深くにいるのでしょうか。」

彼の願いは農民の権力を上げるというものだった。
虐げられる人々、それが我慢ならなかったのだ。
ならばどうすればいい？

やるべきことは表舞台に立たなければ始まらない。

彼の願いに瞳を輝かせていた日々を戻りたい。

彼と共に、彼らと共に歩んでいた日々に戻りたい。

「えぐつ、あ……う……」

気が付けば涙が流れる、歩んでいた、勇者が死んだあと必死になつて勇者の思想を主張していた、ミスティオやソア、ガイストたちを思い出す。

それでも彼らは、成し遂げられなかった。

そこで、私は心の奥底で諦めていたのでしょうか。

「族長、次の立案ですが…どうかしたのですか!？」

「ダリア様!？」

ドアが開く音、そこにいたのは戦士長『ゾアート』と副長の『テラ』。

屈強の黒髪の戦士と、スレンダーな金髪の女性だった。

「いえ、なんでもありません。」

近づいてくる足音に気づかなかった。

それほどまでに思考の海に沈んでいたのだろうか、そう思い涙を無理やりにぬぐう。

「…勇者様のことでしょうか。」

テラ、私が100を超えたことに産まれた女性であり、よく勇者様の話を聞かせてあげていた。
だからこそわかったのだらう。

「…そうですね、勇者様のことです。」

「テラから聞きました。勇者の思想というものを。すばらしいものだと思います。農民のみというものは少々不満は残りますが、しかし、虐げられるものを救うというものは、すばらしいことです。」

ゾアートがそういつて、手に持っている紙の束を机に置く。

「人は…好きになれません。ですが族長、あなたはまだあきらめたわけではないでしょう?」

「ゾアート!」

「テラ!でも俺は、俺を育ててくれた族長の泣いている姿などみたくないのだ!」

ゾアートは両親が病気で死んだために引き取り育てた。だからこそ親のような立場だ。

「…勇者様なら、どういったでしょう。いえ…きっと『生きてるならまだ動けるだろ』っていうでしょうね。」

ゾアートの言葉と、自身の後悔、やっと今わかった。

私は、勇者様の思想をつぶしたくないのだ、勇者様の努力を無視したくない。

「ダリア様、では」

「ええ」

「私は、また表舞台に立とうと思います」

第四話『決意』

息が荒い。
苦しい。

それは修行だからこそ、当たり前なことだ。

フラフラとしながら、大粒の汗が地面にたれる。
レオンはゆっくりとその場に座り込む。

「今日の修行は終わりになります。」

「...はい。」

聞こえているのだろうか、言葉が返ってきても正直わからないものだ、そうシャルロッテ、レオンの母である彼女は思った。

「レオンハルト」

「...はい。」

大した精神力だ。

体の成長を阻害しない程度に、とはいえども休憩と食事管理を完璧にして、疲れを残さないやり方をやっている。
限界ギリギリまでの修行というものは嘘ではない。

この世代の子供なら、ここまでやられたらふつつ嫌がるものだろう。

自身の子供が語った、いった母のような騎士になりたいという言葉がある。

それはうれしかった、
だけど、その目標は自身の子供はしらない。

そんな霧に覆われ知ることのできない夢に、ここまで苦しい思いをしてでもやるだろうか、そう考えて、シャルロットは首を左右に振る。

自身の子をおかしいと思うなど。

「……レオンハルト。」

「はい……。」

回復してきたのだろう、言葉はスツとでるようになる。
だが意識が朦朧としているのだろうか、視点があっていない、疲れ切っているようだ。

「……貴方は何故、強くなりたいのですか？」

「……英雄に……なる。」

英雄になる。

母のような騎士になるという言葉とは違う言葉を発し、クラクラと倒れながらも、ちいさな少年の瞳に炎がシャルロットには見えた。

「……何故英雄になりたいのですか？」

再び聞く、レオンハルトは即答した。

「絶対に…諦めたくないから…ッ」

何をあきらめたくないのだろうか

何故そこまでやるのか

何故、そこまでの炎を宿すことができるのか

「たとえば、世界に裏切られようとも、信じてくれたやつが…いる…から。」

草の上にレオンハルトの体が落ちる。

その音にハッとシャルロッテはハッとして、倒れこむレオンハルトへと近づく。

「寝ているのですか、レオン。」

動かないかわりに寝息が聞こえる。

次までに…2時間の空きがあることを確認して、レオンハルトをだつこの形で持ち上げる。

軽い体　　だつたはずだが、かすかに重みを感じる。

「…これが子育ての喜びでしょうか？」

そういつて柔らかな笑顔をシャルロッテは浮かべ、レオンハルトを木の根元に置き、立ち上がる。

寝顔をみて、再び笑顔を浮かべ、少し悲しそうな顔になり　　空を見上げる。

頬に毀れたのは涙だろうか、涙であれば何に對しての涙だろうか。

「ありがとね、レオン」

レオンハルト

呼ばれて、起き上る。
目の前には母の顔。

「うわぁっ!？」

「母の顔をみて驚くとは何事ですか。」

いやいや、目が覚めていきなり至近距離に顔があれば驚きますって！
そう反論したいがそういつたら怒られるような気配がする、やめと
こう。

「…母上？」

「なんですか、レオンハルト？」

違和感を感じて母を読んでみるが、そこにはいつもの母がいる。
違和感があるのだがわからない、うーん…ああ

「泣いていたんですか？」

「…泣いてなど、おりません。」

目が赤い、頬に涙の痕がある。

これは論ずる意味もなく泣いていたはずだ！

「異議あ「泣いてませんよ?」「…はい申し訳ありません。」

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ!

おれは □答えしようとは

思ったら 風が起こり、頬から血が流れ、母の手には剣があった

な…なにを言っているのかわからねーと思うが

おれも何をされたのかわからなかった…

「なにをやっているのですか、レオン、さっさといきますよ」

「あ、待ってください母上！」

第五話『戦闘』

階級の低い兵士の、粗雑な鎧。

そしてその鎧に釣り合わない剣。

その二つは血にまみれながらも、その逞しさが消えない。

一個小隊、戦争の中命じられたのは奇襲：だった。

それはおそらく彼らもこう思っていただろう。

どうせ途中で倒れる、と。

「ところがどっこい！」

「本当にみる眼がありませんねえあのバカ貴族共は、目をつぶしてあげたほうがまだ邪魔をしないんじゃないでしょうか？」

「フハハハ、天才魔術師ミステイオちゃんにできないことなどないッ！」

だが彼らの予想に反して、俺たちの小隊は強かった。

：まあ小隊といえるかは別として

ソアの皮肉と、ミステイオをテンションMAXの言葉を聞いて、この場にいた全員が笑った。

「ま、魔王の本拠地にはいつてからが本格的にヤバイ：って私の占いにもでてるわ？」

「いや、そりゃ誰にでもわかるだろ。」

「うつさいわね、脳まで筋肉でできてるくせに。」

「アハハ、このまま魔王の首もって『倒してきたよ』と真顔でいったらどういふ反応するだろうな」

「ファイスそれサイツコーだな！」

「何を言っとするのかの、このヘタレクルスは…」

「うるっせーロリババァ！」

「貴様の脳みそに杭をぶち込んだらどうか、この糞ヘタレが。」

リエステイアーナがしゃべり、ガイストがそれをツツコミ。

ファイスが笑いながら冗談をいって、クルスが笑いながら同情しシンシアがクルスを馬鹿にして、言い合いになり…

夢だとわかっていても、何かこみあげてくるものがあつた。

「ねえねえ勇者様？」

「なんだいダリア…というか勇者なんて言わなくてもいいよ。」

「んーん、勇者って勇ましい人ってことでしょ？勇者様は勇者だよ！」

「そーそー、レオンは自分を謙遜しすぎなんだよ。」

そういつて笑うベリー、ダリアも顔を和らげると、俺も小さく笑う。

「たぶん、ここで勝利したらいわなくなと思う。」

「ならば勝利しないといけませんねー、回復しながらしつこく戦闘して嫌になるほどやってやりましょう！」

「…ちよつとずつトウーナが腹黒くなっているねえ」

「ベリーさん、私は純粹無垢なけがれ無き神へ全てをささげるすばらしきシスター、神は私をみているのです！」

「真っ白なのは脳内だ。」

「ベリーさん!?!」

そういつて笑い声がいつきに大きくなる。

「みんな。」

俺が声を上げればすぐに笑いは止まり、真面目な顔で見てくる。
それをみながら、俺は笑いながら声を大きく上げた。

「ありがとうッ！」

この時、俺は知らなかった。
これが最後になるなんて
これが最後の お礼の言葉に、なるなんて。

[illegible]

レオンハルト、7歳

うめき声。

目の前にいるのは魔物。

どうしてこうなった！どうしてこうなった！

時はさかのぼろう。

レオンハルトは7歳になって数日のある日のことだった。父がこう切り出してきたのだ。

「レオンハルト、お前の誕生日のパーティにきていた王族の方がいただろう？」

「はい、あの父上と肩を合わせて踊っていた人ですか。」

「…それを思い出さんでくれ。いくら幼馴染だとしてもおふざけがすぎたと思っている。」

そういつて頭を抱える父は本気で後悔しているようだ、おそらく次の日に父の寝室から剣をもった母がでてきたのがおそらく理由だろう。

「それで、それがどうしたのですか？」

「あ、ああ、それでな、王都で呼ばれたんだ、是非に我が娘の遊び相手に、とな。」

娘…つまり姫、というものだろうか。

前世では姫はみた…ことはあったな。

王の傍らにチヨコンと座っていた…うん、それ以外に接点がない。

「姫…ですか。」

地位の高い貴族の息子ということでもテンパったのに大丈夫だろうか、俺、などと思っではみたが、結局は対応していたので大丈夫だろう。

「ま、はつきりいえばN oと言える権限などないんだがな。」

…ぶっちゃけないでください父よ。

「…わかりました。これでいいですよね？」

「うむ、では明朝の出発だ。」

そういつて父は帰っていきました。

帰って行って　ハイ、明日になり出発したわけですが。

魔物に出会いました。

見慣れたその姿。

魔物という言葉は最近聞いたことがなかったために、目を丸くしてしまい、油断していたことを悔やむ。

だが、そこは前世で戦い続けていたものだからだろう、すぐに剣を引き抜いて構える。

剣は軽い…とはいえない6歳でブンブン振り回してたら化け物なわけだが。

「魔物など…数百年報告がないというのに!」

そういつて父は杖を引き抜く。

杖、といつてもそれは硬く、重い、近接戦闘ができる！とは言いに
くいが、身を守るくらいは普通に可能な護身用程度のものだ。

魔物は何本もある触手を伸ばし、こちらへと攻撃を開始する。

それを回避行動をとり、回避したのだが 前世との魔物の戦闘を
参考にしたせいか、ちよつとだけ傷をつけられた。

だがこの種類は毒といったものをもっていないはずだ、ならば大丈
夫だ。

「ッ!？」

ぐらり、と体が揺れる。

毒だろうか、おそらくそうだ。

…何故、だ？

『魔物、というものはハッキリいつてよくわかっていないわけよね、
だから最初は様子見が必要よ、まあこの天才魔術師ミステイオちゃ
んにかかれ（略）』

…自分の知識を過信しすぎていたか。

『馬鹿ですねえ、前勝った種類だから今度も勝てると思ってツッコ
むなんて、どのくらい馬鹿かというと素っ裸で氷の山のアーヴァン
ベルトに行くぐらいです。』

アーヴァンベルト：どんなに服を着込んでも凍るほどの極寒の山。
裸でいったら数メートルで死ぬ。

今何でこいつの言葉を思い出したのだろうか、いや反論はでき
ないけど。

「レオンハルト！大丈夫か！」

父の声、父が魔法を行使すると体内の毒が消え などしなかった。

「なッ ！？」

驚く声、だが俺の頭は目の前にいる魔物へと伸びる。

今の回避行動と、自分の能力、それを照合して、適切な戦闘を
編み出しているところだった。

ある程度完成したときに走り出す。

剣をひつつかみ 触手を切り裂く。

うめき声をあげて攻撃を開始してくるが、それをよけてその触手も
切り裂いていく。

体がだんだんと重く、痛みが広がっている…が、この魔物をどうに
かしなければならぬ。

戦闘はすぐに終了した、魔物が逃げて行ったからだ。

だがグラリと俺の体は揺れ、倒れこむ。

「…そうか。」

魔物の変化。

毒をもたなかったはずなのにもっていた。

おそらくこれは 年月が創り出した進化なのだろう。

これは いままでのような戦闘では勝てないかもしれない。
そう思いながら倒れこんだ。

今思えば、俺は忘れていたのだろう。

魔物は、魔王がでてきたからこそ、現れたということ。

第六話『姫』

勇者の物語。

それはさらわれた姫を助ける物語。

そんな物語は、ない。

なす

ゼレンがってこなです

喧騒。

一人の女性が淡く見える。

姿は妙齡　その姿母さん。

ああ夢か、だから前世の母さんが見えるのか。
そう思つて俺はゆっくりとその夢をみる。

掴みかかっているのは　俺の仲間たち。
一様に泣きそうな顔をして、…いや泣いていた。

あの皮肉屋まで、泣いていた。

なぜです
なぜレオンが　ってこな　のですか。

言葉は鮮明になっていく。

「何故ですか、何故レオンが帰ってこないのですか！」

そして鮮明に、俺の耳に入ってきた。
それは叫び、悲痛な叫びだった。

「何故、何故あの子だけ報われないのですか、貴族たちはパーティをはじめ、誰もあの子の死をいたわろうとはしない。何故…あの子は優しいのに、とっても　」

泣きながら、泣きながら
何度も、何度も、そういつて。

もうやめてくれ、母さん。

そういつても、夢の映像はなにも変わらなくて

俺が現れるなんて、ご都合主義なんてものもなくて

現実、非常で

仲間たちは、泣くことを強くしていき、みんな顔がぐしゃぐしゃで。

母さんは、その場へたりと倒れこみ。

持っているものを、抱いた。

それは鞘にはいった剣であり。

その剣は血に塗れて

それでもなお、光を放つ。

まるでそれは、まだ終わってなどいないと、言わんばかりに

感じる夢でした。」

「終わっていない、か。」

そういうと、父は俺をゆつくりと戻し、まっすぐに俺を見据える。
何かを考えるようなそぶりをした後に、俺のほうを向いた。

「毒は取り除いたが、どこか悪いところがあるか？」

「いえ、ありません。」

「そうか、それはよかった。動けるか？アイツが大丈夫か一目見た
いというのだが」

アイツ、というのは王様のことだろう。

王様をアイツと呼べるのは父上ぐらいのものだ。

「大丈夫です。いまなら龍ですら倒せます。」

「いや、できればそこまではやめてほしい、父の威厳が消滅する。」

…父上

王の間

「よお糞野郎。」

「黙れダメ人間。」

「あん？俺がダメ人間だったらお前は数倍はダメ人間だ。」

「なにいつてるんだよ、お前は俺の100倍はダメ人間だ。糞王」

おい、子供かこいつら。

父と王が喧嘩しているが、まるつきり子供の喧嘩である。

それもこれも王座に兵士がないわけだが 兵は外にだしたらしい。

いつも通りの感じでやりたい、とか。

いつも通りがこれかな。

「俺の子供はお前の子供の100倍かわいい。」

「俺のミストはお前の子供の200倍はかわいい。」

こいつらはいっ止まるのだろう。

そう思いながらチラリと王座の横をみる。

言い争いをしている二人をヤレヤレといった感じで見ているのが、

おそらくミストといった 姫だ。

見つめていると、視線に気づいたようで、立ち上がってゆっくりと俺のもとにきた。

「えっと、ミスト 様？」

「性格にはミスティアになるわけよ、わかる？勇者メンバーの、てん・さ・い魔術師ミスティオちゃんの名前を真似しているのだよッ

！すばらしいねミスティオちゃん！天才だねミスティオちゃん！」

やばい

こいつまるっきりミスティオだね。

第七話『願い』

「ミスティアちゃんは最強なのだよ、わかるかねレオンハルトくんッ！」

テンションが懐かしい。

そんなことをみながらほのぼのと遊びまわっている今現在。

「超エレクトリックスーパーギガント…ええっとハイパーギガント？…とにかく！すごいのだよ！」

すごいすごいを連発しているところもミスティオに似ているなあ、なんて思いながらほのぼのとしている。

まるつきりミスティオだ、まあミスティオはたしかにすごかった、というか異端と呼ばれるほどに最強だった。

そのせいで俺が見かけたときは一人ぼっちでいた時だった。

『あ…あの子は？』

一人で両足を体育座りになってぶすつとしている少女を見つけて、俺は近くにいた隊員に聞いた。

『ん…あああの娘か』

平民から来た兵士だったからか、友好的に教えてくれる人だった。魔法学校をわずか一年で合格し、一般魔法使いが使用できる魔法を全て使用できるようになり。

そして熟練した魔法使いでさえも使えるものが限られるものを連発する　そんな規格外魔法使い。
年齢は11歳の少女。

華奢な体で、とても戦場にいていいのかと考えてしまうような少女。

『おそらく人間兵器みたいなもんだ。』

『人間兵器…』

戦場だからこそ、そうだったものは割り切ったほうがいいのかもしれない、が、俺は何を考えたのか声をかけてみることにした。
拒否されたらされたで、ああそうか、みたいな反応で終わる、そうだったもので、おそらく自身はすぐに会話は終わるものだと考えていた。

『…や』

『誰…？』

この時のミスティオは人見知りで、　いや、最後まで人見知りだっただろう。

元気な顔を見せたのは俺たちといるときだけだったと思う。

『俺か？レオンだ、結構戦績あげてるんだぜ？』

『そう…すごいんだね…』

意外や意外だった、拒否されると思ってはみたが普通に返してくる……といっても、視線は正直言って友好的というものからは程遠いものだ。

『ああっ、君の名前は?』

『……ミステイオ、ミステイオ・アウラ』

『いい名前だな!』

そんな会話だった気がする。
それが一年もたてば

『ミステイオちゃんってば人知を超えた最強なのだよお!』

になったわけだが。
……何があったつけ?

「なあ、すごいんなら魔法使ってくれないか?」

自慢し続けるミスティアに俺は声をかけてみる。

自分も魔法は使えるようになってはいるが、基本的なものだし、肉体強化といったものばかりだ。

「いいでしょう、みなさいミスティアちゃんの最強パワーを！」

そっいつて魔法を構成し始めるミスティア、――あっという間の上

「……ええええええええ」

そのうえに難易度は高い、そんな魔法を完全に構成した。

ほころびすらない、これがまぐれじゃなかったら確実にこの少女はミスティアよりも上の力を秘めている。

「『氷結の大地』」

魔法を言った瞬間に世界が氷に包まれる。

遊んでいた庭は完全に氷の世界へと変貌していく。

『地形魔法』といったものだ。

自身の有利な世界へと変貌させる魔法。その上に自身の魔力を地にしみこませることにより、構成した世界に命令を送ると作動する。

この魔法からすると、地から氷の刃が生えてきたりする。

この魔法のデメリットは自分以上の魔力を秘めた相手だと簡単に上書きされてしまうことだ。

だからこの魔法は結界などを敷いて相手の地形魔法などに対抗できるようにフィルターのようなものをしかなければならないわけだ。ハッキリ言つと護りに多用される魔法。

「」

そしてこの魔法は、魔法の構成とともに地をそのものに構成したりするために莫大な魔力と莫大な経験が必要となる。

「…う…う…」

うめくような声に気が付き、ミスティアのほうをみると、ミスティアはうめきながらこちらをむき、目が合うとビクリとする。

「すっげえよ…」

天才、最強魔術師ミスティオちゃん

彼女が口にし続けたこの言葉は、確実に嘘でもないし、間違いでもない。

確実にミスティオは最強で天才だった。

だがこの今に ミスティオを超える魔法使いが産まれた。そのことに興奮を隠せない。

「…え？」

心底意外そうに声をだすミスティアの肩を掴み。

「ミスト様、すごいよー！」

「すご…すご…い」

「ああ、すごいー！」

「ふは…ははは、私は、天才最強魔術師なのだよ、こんなこと当然なのだよ」

ミステイア

魔法を使った後に気が付いた、自身の力に対しての周りの反応を家庭教師である男性がいた、その男性は恐怖と嫉妬の視線を送ってきた。

周りの人たちも、だ。

唯一両親だけがさすが我が娘といって抱きかかえてくれた。

だからこの人も、怖がるかもしれない。

そう思つて振り向くと、呆然とするレオンハルト。

ああ、そうだよ。

あの人みたいに、すごい、といってくれるなんてことはないよね。

「すっげえよ…」

「…え？」

そう思つた時に、口に出してきた言葉は、まるであの人のようで

「ミスト様、すごいよ…」

目から涙がこぼれそうになった。

「すごい…すごい」

その言葉を、返そうとして、息が詰まった。
心があったかい、ああ、心地よい。

「ああすごい！」

「ふは…ははは、私は、天才最強魔術師なのだよ、こんなこと当然なのだよ」

出てきた言葉は、虚栄だけど
喜びは、本物だった

レオンハルト

「最強だー！」

「ふは…ふはは、…ありがとう」

「…え？」

「なんでもないのだよ、今日は疲れた、部屋で遊ばないか？」

「…？、
うん、
わかつた。
」

主人公設定

【主人公】

『レオンハルト・クォーツ』

年齢・10歳

性別・男

容姿・金髪蒼眼の容姿端麗な顔立ち…になりそうな顔立ち

体格・剣士ではあるがバネを重視しながらも筋力が高いために、細マッチョ

趣味・家事& amp ;剣

特技・剣& 魔術（古代補助系）

目標・英雄になる

現在・公爵家あととり

過去・勇者だった

好きなもの・剣

嫌いなもの・座学

国籍・カイリス国メルジアンラ

称号・公爵家第一子

能力的に剣は最強の称号を得られるレベルだが、魔術はあまり得意ではない、基本的に補助呪文と、相手への防御を下げる呪文を得ているが

魔術は仲間をアテにしていたために、使えるが威力は低いし魔法の構成に時間がかかりすぎるために使えるほどではない

第八話『魔王』

とある室内にて、王とレオンハルトの父は窓の外をみる。
自身の娘と息子が手をつないで家へと入っている。

「…地形魔法、か。お前が思わず考えたミスティアという名前も運命のように聞こえるな。」

「ハハハ、お前の息子もレオンの名をもつものとして運命を感じる。聞いたぞ？どのくらい強いかという噂をな。…だが娘はやらん、絶対にやらん。」

「ハン、息子もお前の娘なんぞにやってたまるか！」

「愚かだな、我が友よ！娘の可愛さを知れば息子を差し出してもいいと思ってしまうぞ！」

「馬鹿だな、我が友…息子のりりしさをすれば娘を差し出してもいいと思ってしまうのだ！」

不毛な言い争いを数分続けた後に、息をついて二人は目を合わせる。
瞬時の沈黙の後、口が開かれる。

「魔物が現れた。」

「…なんだと？」

自らの親友がいった言葉、それは王として聞き捨てならない言葉。

物語の中の話　　そう片づけられてしまえる勇者の物語の中にいる
魔物。

　だがその爪痕はかなり時間がたった今でも爪痕が残されている。
だからこそわかる、『魔王など再び登場してはいけない』と。

「魔物など勇者の物語の以前にはいなかった、つまり魔王とつなが
りと考えても良いのでは？王」

「クォーツ公爵、早計だとは思いますが　だが調査するべきだ。」

雰囲気は一変して権力者の会談へと変貌する。
ピリピリとした雰囲気を感させた。

「他国へと報告を？」

「いや、それは早い、確信を得なければただの世迷言にしかならな
い、魔物の存在だけは送っておくが魔王については予測だ、それ
については随時結果待ちとなる。確信を持てばすぐさま報告をする。
だが最悪を先に見て行動することも必要だ、軍備については予算な
どを見よう。」

「わかりました。」

「　娘は異常なほどの才能を持ってしまった。護ってやらねばな
らない。それはお前の息子もだろう？」

「…はい。」

そう考えて、クォーツ公爵　　いや、父として『アリオスティオ・
クォーツ』として発言する。

魔物との戦い、それを考えてもあの強さ。

「貴族の連中は祀り上げるだろうよ、『勇者の最誕』だとな。」

「…ああそうだろうな。…だがあいつが決めたことだ、アイツは『英雄になる』といった、子供の目ではなかった。」

「…そうか、まあそれも良いだろう、だが俺は使い捨てにされることだけは絶対に嫌だ。俺の娘だぞ？超プリチーだぞ。」

「…シリアスムードが台無しだボケ」

アリオステイオのツツコミにもどこ吹く風で窓の外をみる、青空、どこまでも続く空。

「…昔庭で遊んだ時、近くにいたメイドの言葉も聞かずに野原で寝転んで空をみたよな。」

「そうだったな、あの時は何でもできそうな気がしていた。国の汚濁を取り除けると思っていた。」

「ああ、それでこの青空みたいに綺麗な国にするなんていったいた。今や俺たちは諦めかけていた。…けどなアリオステイオ、俺は思うんだ。」

「ああ、何をだ？」

「本当に魔王がいたとしたら、これはチャンスだ。」

そういつてニヤリと笑う王へと、アリオステイオは目を大きく開け

て、すぐに戻した。

「おい、おいおいおい」

驚きを隠せない顔をしながらも、笑いがこみあげてくる、そんな状況のアリオステイオを王は笑う。

「国を綺麗にして魔王も倒す、なんてすばらしいのだろう。」

「大体勇者の狂信者っていうのは汚れた連中が多いからな、過去の英雄譚に乗っかって『俺たちは偉い』と信じ切っている」

「だからこそこれを利用する」

「大丈夫か？ 一歩間違えれば国が終わる、魔王の侵攻と国の浄化だ。」

「ハッ、できなくてどうする、俺はこの国の王だぞ？」

笑いながら彼は窓から離れる、アリオステイオも笑い始めていく。

「俺は娘が英雄になりたいといえは拒絶しない。」

「俺も息子が英雄になりたいといえは拒絶しない。」

「『だが子供は俺の宝だ、糞のような貴族どもに、言いように使われてたまるものか』」

- - -
- - -
- - -

レオンハルト

「ふむ、レオンハルトはそんなことをやっていたのか。」

「ああ…母上はやバイ。だけど強くなるってことは必要なことだと思う。」

そついうとミスティアは悲しい顔をする。

まるで誰かを見透かしているように俺をみていた。

「ミスト様？」

そのまま固まっているミスティアへと声をかけると、ビクリと反応を示し目があった。

そして驚くと首を左右に振る、その間に俺はポカンとするしかなかった。

「そ、そういえばレオンハルト、聞いたのだが…倒れたそうだな。」

「あ、ああまいりました、あの時は　まさか魔物に出会ったとは」

そのときだ

カチンとミステリアが止まったのは。

「…魔物…だと…？」

「…え、どうか」

☞

魔物なんていなかった、牛とか馬とかがいて、怖いものと言ったら野生のオオカミ。

そんな世界に、突如として魔王という存在が現れたわけだ。

この大陸以外にも国はあったわけだが、簡単に陥落、そして最後はお前らだと言わんばかりに魔物の大群引き連れやってきたわけで。

☞

「

」！

気が付いた…！
重大なことに…ッ！

第九話『決意』

何が間違っていたのでしょうか。
勇者の何が間違っていたのでしょうか。

雨の中思い出す、城に設けられた勇者の墓。
その墓は功績に対してささげられたものなのでしょうか？
…いいえ、違うでしょうね。

それはシンボルなのです、そう、それは醜い貴族どもが掲げる自らの権力のシンボル。

後ろにいるのは勇者の仲間たち、目の前にあるのは何とも武骨なお墓。

すすり泣きが響く、そんな空間に、私は泣くこともなく、ただひたすらに彼のお墓を見続けることしかできない。

『レオン　ここに眠る』

そう仲間たちが武骨ながらもがんばって掘ったその文字と、墓につきたてられた彼の剣は太陽の光をさえぎり、暗く大地を染め上げている、そんな光の入らない今でも神々しく光を発し続ける。

主が死んだことがわかっていないのか、それとも

まだ終わっていないとでもいいたいのだろうか。

後者ならうれしかった、たとえ魔王がまだ死んでいなくとも、彼が生きていればそれだけでうれしかった。
それはとても自分勝手なことなのでしょう、ですがそれでも願わないではない。

だって…だってそうじゃなきゃ、レオンが救われないじゃないですか…！

努力が結果になるわけではない、そんなことはわかっている。
でも沢山努力したのだから、少しぐらいかれの願いを聞いてあげてもいいじゃないか！

…何が間違っていたのでしょうか。
勇者の何が間違っていたのでしょうか。
いいえ、間違っているのは世界でしょう。

だから私は願うことにします。
再び　彼と出会う日がくることを

- -
- -
- -
- -

月日は流れるものだ。

それは新たな生を受けるような、そんな規格外の状況下でも変わることはない。

響き渡る鉄と鉄がぶつかり合う音、そこにいるのは大人になりかけであろう少年。

年齢は12、彼の名前はレオンハルト。

彼の母の目論見通り、彼の容姿は美少年といっても過言ではないレベルになっている。

動きは実力者のそれ、…とまではいかない。

やはり動きが彼の思考についていけないのだろう。

彼の持つ短めの剣はシャルロッテの一閃によって弾き飛ばされる。

「今日はこのぐらいで終わりにしましょう。しびれている状態で何度もやっても無意味です。」

「はい。」

汗をぬぐい、レオンハルトは上を向く、太陽がまぶしい。

「…なにを勘違いしているんだ。」

「は？」

「まだ魔法学の勉強がありますよ。」

「…ハイ」

なにか一瞬自らの母の背後に何かが現れた気がしたレオンハルトだが、総スルーすることにした。

「…レオン」

「はい？」

次の勉強へと向かおうと思い、剣を鞘に納めていると、母に呼ばれ

てレオンは振り向く。

「あなたが強くなりたいと言い出してもう何年もたつんですね。」

「はい」

魔物、という存在と魔王という存在。

たしかに過去魔物という存在もしていなかったし、長らく魔物という存在を確認されていないことは確かだ、ハツキリいうと魔王と魔物という関係を括り付けてしまえばいくらかでも疑える。

しかし、そういうものは可能性であって、大っぴらに公言するほどのことでもない。

…そのうえ、おそらく父もわかりきっていることだろうから。

「何故かは問いません、存分に母から剣を、父から魔法を吸い上げなさい。」

「ハイッ！」

父は母に魔物が現れたことはいわなかったが、まあ鋭い母のことだ、どうせ知っていたりするだろう。

魔王という存在を聞いたときに、母の表情は一瞬であるが変わる、

深い怒りという表情に。

母上と魔王とのつながり…というものはよくわかってはいないが、そんな表情をする母に対して、父としてあまりそういう表情をしてほしくないのだろう。

だれだって愛する者の怒る姿などみたくはないだろう。

レオンハルトはそう考える。

そう考えて、自身のやるべきことを考え、そして歩き始める。

強くなろう、魔王を倒せるほどに

みんなを心配させないように

もっともつとがんばれば、強くなれる。

彼は、レオンハルトは沢山のことを教えられながらも、それでもなお、壊れている部分がある。

だからこそわからないのだろう。

そう思った思考が、さらに人々を心配させていることを

「…レオン。」

シャルロツテはゆっくりと自身の息子の歩いていく姿をみて、小さくつぶやいた。

その言葉は小さく、レオンの耳にはとどかない。

「私が、あんなことにはさせない。」

第十話『道化師』（前書き）

自身の書く主人公といものがコイツ。
相変わらずちよつと変なヤツを書くことが好き。

第十話『道化師』

キラキラとした汗。

クワを振るたびに、土が舞いあがり、土の匂いがふわりと鼻を通る

その感覚が楽しくてやめられない。

「ひゃっほう！」

近所の、といつても村だから隣が50メートルぐらい開いているわけだが、そんな村でも変人と名高い少年が農業をふるう、その顔は本当に楽しそうな笑顔だ。

『変人』と名高い（？）この少年がこの村の中、女性にとても人気があるのはこの本当に楽しそうな笑顔があるからだろ。

彼の名前は『ファイカ』地位低き農民であるが、彼はこの状況を楽しむという変人っぷりを見せてつけている。

この少年もまた、勇者と共にあり続けたファイスという名前を持ち貴族では異例すぎる思考を持って親に縁を切られたような前世をもつ、そんな少年だった。

このファイカ、前世の物語というものが改築されまくって貴族に利用されまくっているわけだが、

そんな中で物語の中での彼の前世である『ファイス』という名前は『超天才・貴族の中の貴族』である。

前世なんてなかった、冗談でもそういつてしまいたいほどの変更だが、ファイスの反応はケラケラ笑いながら『ファイスちゃんってば天才ね』とミステイオの真似をした。

行動も意味不明の上言動もよくわからない、そんな少年がファイスであるが

彼はハッキリ言うところ貴族の中の貴族というところ意外を抜かせば、変更されている点の『超天才』という部分は完全に当てはまっているのだ。

おそらく、仲間内でこの少年は本当の意味での信頼というものを向けられていた。

貴族が何か手を向けて、勇者と勇者の仲間たちを殺そうとしたとき、彼はいち早くそれを見抜き、対処した…それもヘラヘラと普段の表情を一切変えずに。

気が付けばすでにファイスが手を打ってある、普通ではまったく考えられないほどの思考回路をもっている。

策士『ソア』でさえも彼の思考は見抜くことはできない

ミステイオでさえも、彼という存在はこれっぽっちもわからなく

勇者の仲間たちは天才といえる人物が沢山いるわけだが、その知識人の中でも理解されないが

彼はそんな訳の分からない存在であつたとしても、とてつもなく信頼されていた。

…たぶんだからこそ勇者の仲間になつたんだろう。

かつての彼、ファイスであつたころの彼が侮蔑と呼ばれていた

のが『道化師』だった。

だが彼はその呼び名を笑いながら仲間と呼んでくれと頼む、理由は「かつこいいから」だ。

馬鹿にされていることを聞いていた仲間たちは呆れながらも爆笑した。

彼は昔からこういった生き方をしているわけではない。
それにはちゃんと理由があるが それは後々の話になる。

「ひゅっつおおおっ！」

もはや何の掛け声かさっぱりわからないがクワをふるうファイカ楽しそうだから気にしないことにする。

それも周りに住んでいる村人も慣れてしまっただけそう考えているだろう。

おそらく「お、やってるやってる」が反応だ。

「ルーベンスッ！」

誰の名前だそれは。

「ベアトリス！」

いや、だから誰のだ。

彼の親は母が病弱で、父はガタイのいいおっさんだ。

母は貴族の家系だが、病弱で貰い手がなかったために邪魔者扱いされていたのだが、母親は自分が要らないものだと思い、屋敷を飛び出し、路上で倒れているところを父が見つけるといった物語にありそうなる展開だ。

母のほうの一目ぼれだったらしい、一目ぼれだった上に母親はヤンデレといった性格だったらしい。

いかななく発揮され、普通の男ならドンビキなことでも父親は『貴族ってこういうものなのか…』というどこかズレた感性を持って受け入れたりする。

そしてファイカが生まれたわけだが、変人っぷりをみせつけても村人は『あああの両親だからな』だった。

「クルツチ！」

相変わらず奇妙な掛け声で振るうクワをとめる。

周りを見回して満足げな顔をする、どうやら終了のようだ。

そんなときだった、女性の悲鳴が聞こえたのは。

「キヤアアアア！」

「…この声は…そうだな…えっと…三軒隣りのマイクさんか」

隣の家の、幼馴染である『リア』の声である。

四歳のころから、8年の付き合いである。

そのうえマイクさんは五軒隣のうえ男である。

近くに人がいればツツコミをいれるだろうが、そんな人物はいない。クワをもって向かってみるとそこにいたのは…

「ああ魔物が、つてことは魔王再誕つてことだな。」

魔物である、驚きや緊張感なんてそんなものはなかった、そういうほどの淡々とした反応だ。

どこかに台本でもあるのか。

「ちょ、ちよつと、なにブツブツいつてんのよ！助けなさいよ！」

植物のような魔物で、ズブズブと下半身が飲み込まれている。

「その前に聞きたいことがある」

だがそんなときにもファイカはあわてない。

「は？なによ！つーか助けなさいよ！？っていつか助けてください
！」

「どんな感触？」

「それは助けてから教えるわよ！だから助けなさい…っていったんでしょがゴルアアアア！」

リアの茶色の髪の毛をぶんぶん振り回され、そしてリアは完全にブチ切れている状態だ。

「そんなときでもファイカくんは慌てないのだよ。」

「ぶっ殺すわよ！？」

殺す発言、完全にブチ切れ状態だが、ファイカは助けた後ぶん殴られるんだろうな、と他人事のように考えた後にクワをもち、木を利用して高く飛び

「うん、このクワって実をいうと普通の十倍は重いんだよね。」

魔物を叩き潰した。

「うん、僕が農民を謳歌しているかと思った？半分ハズレ、半分正解だけどさ、実をいうと体作りもしているわけだよ、どうだ！すごいだろ！」

「死ね！…ああもうグチヨグチヨ…うう…」

「リアもうお嫁いけない！」

「本当に殺されたいよね、この変人ピエロ！馬鹿ファイカ！」

そもそもファイカは森を遊び場に使っていたので身軽だ、そしてクワについては何年も使っているので普通にもてる。

ファイカは前世一緒に過ごしていたレオンのもつ『身軽さ』というものがとても欲しかったものの一つだ。

剣の腕前は知識であるし、まあその代わり元の剣術という技量は落ちるだろうが、それでも使いやすいためにこっちでよかったと思っている。

「…あらま、再生しているんなんで。」

「うげえ！」

リアの少女とは思えないほどの声を聞いたがファイカは総スルー。

やれやれといった具合にクワを構え、再生しはじめている魔物に近づき

「わっしよいわっしよいわっしよいわっしよい！」

畑のごとく、耕す。

「うわぁ…」

リアがえげつないものをみる眼をファイカに向けていたがそれもスルー。

ついには魔物が力尽き、倒れこむ。

「うむ、進化しとる！」

「もついや…もついや」

何かリアがトラウマをもってしまったようだがそんなことはどうでもいい。

倒れこんでいるリアへとファイカは手を差し出し、リアはそれを見た。
「ちょっとだけリアは顔を赤らめて、ボソボソと「べ、別に……うれしくないんだから」なんて言葉をボソボソいいながらその手を取り、立ち上がる。」

「で」

「……え？」

「どんな感触だった？」

「……死ね！」

リアのコースクリューがファイカに見事に決まった。

第十一話『貴族』

男ファイカ、今日も

「おほほほほ！」

変な声をあげて畑を耕しますわよ！

「気色悪いわアア！」

「ひでぶっ！」

そして当然のごとく殴られる、そんな日々だ。

そもそも昨日で畑は耕し終えたし、種もまき終えた。

あとは日々の管理が最重要になる、もうすぐ他の種もまく日になるし。

「だから畑仕事ってやめられない。」

「何言ってるのよ…それよりもまーたあいつら来てるわよ？まああンタの母親が仕掛けたトラップに引っかかって重症ではあるけど生

きてはいるし、記念に話でもきいたら？」

なんの記念なのだろうか、そうツツコむ人物はここにはいない。
あいつら、というのは母親の両親：ファイカからしてみれば祖父祖母の関係にあたるやつら、まあつまりは貴族の雇っている兵とかがいるわけだが。

自身の母親『メルティア・ヴァルツシュタイン』を家に戻すため、あわよくばその血を受け継ぐファイカを家に入れるためにやっている。

リアモリアで最初は…といっても小さなころだが

『ファイカいっちゃうの？』と心配していたわけだが、ニコニコしながらファイカが兵たちがトラップに引つかかる様子をみせたところ『逆にいっちゃったほうがいい気がする…兵がかわいそう』といった具合に変化した。

『衛生兵…！シュウ、目をあけてくれええええええ！』

『くそお、メルティア様は化け物か！？』

『落とし穴…までやめろ、死ぬ死んじやう、そんな木がぶつかってきたら死んじやうからアア！』
まさしく戦場だ。

「さて、指をさしながら半笑いでみてこよう。」

「とりあえずやめなさい、兵が確実に泣いちゃうから」

そんなこんなでファイカは歩き出す。

「やっと…やっと到着したよ母さん…！」

「苦節10年以上…やっとメルティア様の顔を拝見できた…！」

到着してみると、そこにいたのは男泣きをする兵たち

「…すでに泣いてるわね。」

「よし！」

「だからってやらないでよね!？」

リアとファイカが会話して、ファイカの母のメルティアと父の『ライアット』を見る。

「…さすがに辛い道のりを選んでくるとは、さすが貴族の兵…」

そんなことを口走っているライアットにリアは呆れるしかない。
何故こんなことになっているかわかってないこの人は。

「ダメだわ、かえるの子はかえるってわけね。」

ハアとため息をはいて、問題のメルティアをリアはみると、ニコニコと笑っている。

ニコニコと…自分がボロボロにした被害者側を笑ってみる加害者…なんともおかしさ満点だが、リアはこんなものだよな、と思って諦めることにした。

「帰れ。」

メルティアの最初の一言がこれだった。

「切り捨てたー！！」

「リアは実況解説の才能があるね。」

「死ね！本当にお前は自重しろ！」

リアの叫びに、感心した顔でファイカは言う、そんな真面目に感心した様子のファイカにリアは、完全に本気のようにだからこそマジ切れして言った。

「め…メルティア・ヴァルツシュタイン様！」

「私は農民の妻メルティアです。今の幸せな状況を汚すならたとえ貴方達でも四肢を切断して逆さにして城下でさらしものにしますよ？」

「怖ッ！？ファイカ、あんたの母親今さらつとすごいこといったわ

よ!？」

「いつものことじゃないか」

「い・つ・も・のコトジャナイカアアア!？」

「それよりもちょっと黙ってなよ、母さんが恐ろしいくらいにえげつなく兵を言葉の刃でぶった切るから」

「あんたの母親それでもいいのか?!」

兵たちの顔が真っ青だ、前は500人できたわけだが、今回はおそらく600人くらいできただろう。

それでも目の前にいるのは2人、どれだけの道のりをやってきたのかわからない。

「さて、約10年ぶりに『元』両親の家の兵たちに出会ったわけですが、それは水の泡です無駄なことです、ハッキリいっていいですが、10年間頑張り続けましたおめでとう、今日は達成しました無駄です、さようなら、人の人生が80年とするなら10年間は8分の1なわけですが、あなたは馬鹿みたいに8分の1を消耗しましたね?そしてその8分の1をかけてたどり着いたものはただの塵気楼です帰れ」

「おお、兵たちがあぐりと口をあけて固まったよ」

「そりゃ、必死にやってきた日々を軽く切り捨てられたらそうなるわよね…」

「ソアと同レベルの毒舌、これはすごい。」

「ソアって誰だかわからないけど私はそのソアってやつとは会いたくないわ」

：会えないけどね、そう思ったがファイカは口に出さずに目の前の光景をみることにする。

「で、ででですが、ファイカ様の気持ちを考えましょう。」

兵が起動したかと思えばこっちに話を振ってくる。

「き、貴族になりたいですよねえファイカ様？」

目が『なりたいたいと言え』という視線でこっちを突き刺してくる。

リアがファイカを少し心配そうに見ているがファイカの表情は変わらない。

「ふふ、そうだね、考えてみると貴族は魅力的だね。」

兵たちが希望をもった目になる。リアはその瞬間に心配そうな顔をやめて兵たちに同情した。

「お金はあるし、勉強もできる剣もならえるかもしれないし魔法もよく知ることができる、すごいね、とてもじゃないけどいいことがたくさんある。」

「で…では」

「うん！」

元気よく頷くファイカに希望を向ける兵たち

「ま、どうでもいいけど。」

「ボツシュート」

「チックショオオオバアアアア!？」

メルティアがどこからでたのかわからない紐をひくと、兵たちは地面が開き落ちていく。

「落とし穴か…子供のころ作ったなあ。」

そんな中でもフェイスの父ライアットは非常にマイペースだった。

第十二話『幼馴染』

彼の名前はファイカ。

貴族の血を持ちながらもクワをもって振り回し続ける農民であり、過去勇者と共にいたものの記憶をもって生まれた、そんな奇想天外な人生を送っている。

ファイカという人物に関して言えば、やはりファイスとスペック、いわば才能的なものが同じなのだろう。頭が回るが、やはり剣術の才能はない。

基本的に経験を積まなければ戦闘もできないレベルで、感覚で戦えるという才能を持ち合わせていないが、彼自身の武器は『思考』、戦いの戦術も確実に勝利の一手を選び出す、そんな能力をもっている。

だが、その思考は最大にして最高の武器。

彼は思考が複雑で、つかみどころもなく、理解されようとは思わず、そして理解されることはおそくない。

受け入れられることはあつたけど

将来の夢、特になし

野望なんてもつてのほか

辛い過去？そんなものあつたかな

全てが終わったかどうかと思うていたか？

そうだな、旅にいろいろ

そんなこんなで畑仕事を終えて帰ってみると、家に家族以外の人影を見る。

そこにいたのは美人さん、貴族のかたかな？

おそらく結構なやり手、小奇麗な服がそれを物語っている。

…さつき爆発音があったから、おそらく母の畏は外されていないことはファイカ自身知っている。

「…すごい使い手なんだね。母さん。」

「うんシャルロッテは私の幼馴染だからね」

「うん、それでどれだけすごいかわかるよ。」

ファイカは異常といえるが、自身の異常性にも家族の異常性にも気づいている。

だからこそわかる、幼いころといえども母と共にいた人物が。

「ファイカ、でしたね？」

「…はい。」

向き合ってみて気づく、とてつもなく懐かしい気分。

「…はじめまして”ファイカ”」

名前を強調されて、ピクリと反応するファイカ。
そして

ニヤリ、そう笑う。

道化師の笑み、変わらない雰囲気がそこにあつた。

「始めましてだ、”シャルロッテさん”」

そう返答するとシャルロッテも笑い返す。
やはり、そう口は動いていた。

「なあメル、ファイカの名前はやはり」
「

メル、というのはファイスの母のあだ名みたいなものなのだろう。

「え、うん勇者の物語からきたんだよ？」

「…これも運命なのだろうか？…私はまったく違うというのに。」

「どうしたのロッテ？」

何かブツブツ言い始めるシャルロッテにメルティアは首をかしげるが、即座にシャルロッテはごまかし始める。

「いや、なんでもない　すまないがファイカと話をさせてくれな

いか？同年の『息子』がいるんでな。」

「おおーロツテが普通の口調で話してる。聞いたの何年振りだろう？」

「おそらく12年ぶりだ。」

「おおーそんなにもかあ、時がたつてのははやいものだねえ。あ、話だね？してもいいよー、ご飯作るから、その間でもー」

「ありがとう」

パタパタと台所のほうにかけていくメルティアを横目に、シャルロツテは笑いながらファイカをみる。

「やつ久しぶりだねーファイス？」

「色々変わったねベリー、出るところがやっとでたというか。」

「死ね！」

「おっと。」

シャルロツテ：いやベリーの挨拶に、いじる感じで返答するファイ

ス。

変わらない光景がそこにあった。

「ぐぬぬ…回避能力ばかり高い…！」

「フハツハ、これぐらいなきや生きていけなかったし。」

そういつて手をヒラヒラさせるファイスにベリーがケラケラと笑い始める。

「お前はいつまでたつても変わんないんだな、ファイス。」

「君は変わりすぎたとおもったけど…まあそんなでもないものだ。目をつぶれば”前”の君が思い出せる。」

そういつて目をつぶつて笑うファイスにベリーはいつそう笑いを強める。

だがすぐに顔は真剣になる。

「驚くなよ、ファイス。」

「…なんだいベリー」

そしてファイスの顔も真剣になる。

「実は…」

空気が冷える、この道化師も驚くだろうか、などとベリーは考えてみる。

「魔物が…現れた。」

「なんだってエエ！」

…考えてみて、思いつかなかった。
思いつかなかった上に、見れなかった。

「…」

「うん、知ってた」

真顔で返答するファイスに殺意がわくベリー。

「だって戦闘したし、まあ勝ったけど。」

「だったら次だ次…よしこれだ。」

そういつてまっすぐファイスをみるベリー。

そして

「レオンは私の息子だった。」

「わあすごい。」

「…」

「……」

驚かないのかよ、そうベリーは心の中で叫んだ、口で言ってしまった
では敗北感に襲われそうだったから声には出さない。

「いや、生き返っている本人が驚いてどうするのさ。」

「しまったぁ！」

そういつて頭を抱える…30代の女性。

「ま、いいや、レオンはどうしてる？」

「強くなっている、…おそらく剣の腕は前回以上。」

「…それは頼もしい。」

「本気で言ってる？」

「…いやまったく、レオンは強ければ強いほどに抱え込んで、罅が入っている。できれば強くなければよかった。彼は自身のことをよくわかっていて…からね。」

少し話そうとした言葉を止めるフェイス。

そういつてフェイスは次に、「だけど」を付け足す。

「弱くても、彼はすでに背負っているから。どっちにしる脆い、だから強いほうがまだ彼は進める」

「進む方向はどうなるかわからないけどね、…ねえフェイス、一つお願いしたい。」

「どうせ同い年のほうが近しくなれるから進む方向をかえてくれっていうんだろ？」

「よくお分かりで。13になったら4年間の学校にいられるわけだけど。フェイス、君をねじ込もうと思う。」

「めんどくさいなあほんっとーにめんどくさい…ま、受けるけどね。」

そういつて笑うフェイスに、ベリーもつられて笑った。

道化師設定

【迷脇役】

『レオンハルト・クォーツ』

年齢・12歳（この話現在）

性別・男

容姿・黒髪、整っている容姿

体格・力はあるが細い

趣味・農業・幼馴染いじり

特技・裏を呼んで余裕を持っていた敵を泣き叫ぶほどに苛め抜く

目標・どうでもいいけど終わったら旅に出よう

現在・貴族の血を持った農家の息子

過去・勇者の仲間

好きなもの・半泣きの顔

嫌いなもの・自分以外が仲間をいじめること

戦闘方法は色々なものを利用する戦い方。

そして用意できれば敵を精神的にボコボコにするやりかた。

これが前世。

今現在は能力的な強さをもっているために、前世の魔法知識と共に前世の戦闘方法を取り入れ

さらにえげつなく人をガンガン精神を削るやり方を取り入れている。戦ったらトラウマになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5430w/>

心願成就に大切なこと

2011年11月21日19時33分発行